

カシタンカ

КАШТАНКА

アントン・チェーホフ Anton Chekhov

青空文庫

一 行儀がわるい

まるできつねみtainな顔つきをした一匹の若い赤犬が——この犬は、足の短い獵犬と番犬とのあいこののだが——歩道の上を小走りに行ったりきたりしながら、不安そうにあたりをきよるきよる見まわしていた。赤犬は、ときどき立ちどまつては、泣きながら、こごえた足をかわるがわる持ちあげて、どうしてこう道にまようようなへまなことをしてかしたんだろうと一生けんめい考えた。

赤犬は、自分がどんなふうに、きよう一日を暮らし、どうして、しまいにこの見知らぬ歩道へまよいこんだのか、はつきりおぼえ

ていた。

たしか、きょうが始まったのは、主人のさしもの師ルカー・アレクサンドルイチが、帽子をかぶり、赤い布切れに包んだ、何か木製品をこわきにかかえて、——

「カシタンカ、行こうぜ！」

と呼んだ、あのときである。

自分の名まえが呼ばれたのを聞くと、カシタンカは、今までかんなくずの上でねむっていたが、仕事台の下から、ごそごそはいだしてきて、さも気持よさそうにぐつと一つのびをしてから、主人についてかけた。ルカー・アレクサンドルイチのお得意さきは、みんな、おそろしく遠いところにあつたので、そのうちの

一軒にたどりつくまでに、さしもの師はなんども居酒屋へよつては、ぐつと一ぱいひっかけて、元氣をつけなければならなかった。カシタンカは、その道々、自分はずいぶん行儀がわるかったのを思いだした。散歩につれて行つてもらえるのがうれしかったので、ぴよんぴよんとびはねたり、鉄道馬車にほえついたり、よその家々の庭さきへはいりこんで、その犬を追いまわしたりしたのである。さしもの師は、しょっちゅうカシタンカのすがたを見うしなつては立ちどまり、ぷりぷりしながらどなりつけた。一度なんか、今にも食いつきそうなこわい顔つきで、カシタンカのきつねのような耳をひつつかみ、ぐいと引っぱって、とぎれとぎれにこんな悪たいをついたりした。

「くた……ばり……やが……れ、……この……コレラやろうめ！」
お得意さきをまわりおえると、ルカー・アレクサンドルイチは、ちよつと妹のうちへよつて、そこでお酒を飲み、軽く腹ごしらえをした。妹のうちを出てから、彼は知りあいの製本屋へまわり、製本屋から居酒屋へ、居酒屋から名づけ親のところへというあんなばいに、あつちこつちへ顔をだした。つまり、カシタンカがこの見知らぬ歩道へやってきたころには、もう夕がたになつていて、さしもの師はべろべろによつぱらつていた。かれは両手をふりまわして、大きな息をはきながらぶつぶつ言った。

「おれは、どうせ生まれぞこないさ！ ああ、そうとも！ 今だからこうしてのんきに町を歩いて、街燈なんか見ちやいるけどな、

おれが死んだら——地獄の火で焼かれるにちがいないさ。……」

そうかと思うと、急にやさしい調子に変わって、カシタンカを呼ぶと、こう言った。

「なあ、カシタンカ、おまえは、まあ、いいところ虫けらだな。もつとも、人間とおまえのちがいは、まあ、さしもの師と大工のちがいみたいなものだなあ。……」

ルカー・アレクサンドルイチが、カシタンカをあいてにこんなくだをまいていたとき、とつぜん音楽が鳴りひびいた。カシタンカがふり向くと、通りをまつすぐ自分のほうへ、一団の兵隊が進んでくるのが見えた。この音楽を聞くと、たまらないほど神経がいらいらしてきたので、カシタンカははねまわって、うううとう

なった。ところが、おどろいたことに、主人のさしもの師は、きもをつぶして金切り声をあげたりほえたりするかわりに、顔じゆうにえみをたたえ、気をつけの姿勢をとり、五本の指をそろえて挙手の礼をした。主人が平気なのを見ると、カシタンカはいっそう大きな声でほえたてて、われを忘れていっさんに通りを横ぎり、向こうがわの歩道へとんで行つた。

カシタンカが、ふと我にかえつたときには、もう音楽はやみ、兵隊もいなくなつていた。そこで、赤犬はふたたび通りをわたつて、さつき主人をおきざりにしてきたところへかけもどつた。すると、——ああ、どうしたことだろう！——そこには、もう、さしもの師はいないのだ！ カシタンカは、向こうへかけたり、か

けもどつたり、もう一度、通りを向こうへわたつたりしたが、さしもの師のすがたは、まるで地の底へもぐりでもしたように見えなかった。足あとのおいで主人を見つげようと思い、歩道の上をくんくんかぎまわつてもみたけれど、その前にどこかのろくでなしが新しいゴムのオーバーシューズをはいて通つてしまったとみえて、今ではもう主人のかすかなにおいが、すっかりどぎついゴムのおいにまぎつてしまつて、何ひとつかぎわけることができなかつた。

カシタンカが行つたりきたりするばかりで、まだ主人を見つげだせないでいるうちに、あたりは暗くなつてきた。通りの両がわには街燈がともり、家々の窓にも、明かりがさし始めた。大きな

綿雪がふつてきて、石をしきつめた道路や、馬の背や、辻馬車のぎよしや馭者の帽子を白くそめた。そして空気が暗くなればなるほど、いろいろなものが、いつそう浮きだして見えた。すぐそばをおおぜいの《お得意さん》たちが、ひっきりなしに行き来して、カシタンカを足でつきとばしたり、目の前に立ちふさがったりした。

（《お得意さん》というのは、カシタンカが人間全体を、主人とお得意さんとにわけていたからである。主人とお得意さんとのあいだには、ひじょうな違いがあった——主人は、カシタンカをぶつ権利があるが、反対に、お得意さんに対しては、カシタンカのほうで、そのふくらはぎにかみつく権利があるのだ。）お得意さんたちは、どこへ行くのか、ひどくいそいでいて、カシタンカに

は目もくれなかつた。

あたりがすつかく暗くなると、カシタンカは急にがっかりしておそろしくなつた。赤犬は、とある家の車よせにかじりついて、はげしく鳴き始めた。一日じゆう、ルカー・アレクサンドルイチのおともをして歩きまわつた旅行のおかげで、へとへとにつかれ、耳や足がすつかりこごえ、おまけに、ひどくおなかがすいていた。きよう一日のあいだに、ともかく口をもぐつかせたのはたつた二度——それも、製本屋でのりをすこしなめたのと、一軒の居酒屋で売り台のそばに腸づめの皮を見つけたのと——まさにこの二回だけだつたのだ。もし、カシタンカが人間だつたら、きつとこんなことを考えたにちがいない。——

「ほんとに、これじゃ生きていけない！ ピストル自殺でもしなくちゃ！」

二 見知らぬ妙な男

けれども、カシタンカは何も考えないで、ただ鳴いてばかりいた。やわらかな綿雪が、赤犬の背中や頭にいつぱいふりつもった。カシタンカは、つかれきって重苦しいねむりにおちこんでいった。と、そのとき、とつぜん車よせの扉がぎいと開いて、そのひょうしにカシタンカの横っ腹にどすんとぶつかった。カシタンカは、思わずとびあがった。扉の中からは、《お得意さん》の部類には

いるひとりの男が出てきた。それを見ると、カシタンカは一声きやんと叫んで、その男の足もとへかけよつたので、男は思わずこの赤犬に目をとめた。男はかがみこんで、こうたずねた。

「おい、わん公、どこから来たんだ？　今、おれがふんづけたかい？　おお、かわいいそうに、かわいいそうに……まあ、おこるな、おこるな……おれが悪かった。」

カシタンカは、まつ毛にもつた雪を通して、この見知らぬ男を見あげた。前にいるのは小柄なふとつちよで、きれいにそりあげた、まるい顔をして、シルクハットをかぶり、ボタンをかけずに、外とうをはおっていた。

「何を、くんくん言ってるんだね？」と、見知らぬ男は、指でカ

シタンカの背中をほらい落としながら、つづけた。「おまえの主人は、どこにいるんだい？ ほほう、はぐれたんだな？ かわいそうなわん公だ！　ところで、どうしたもんだらう？」

カシタンカは、この見知らぬ男の声に、暖かい、親身な調子をかぎつけたので、男の手をぺろりとなめて、いつそうあわれっぽく鳴き始めた。

「おもしろい、いい犬だ！」と、見知らぬ男は言った。「まったく、きつねによく似ている！　さて、今さら、どうしようもないから、どうだ、おれといっしょにこないかね！　ひよつとすると、おまえも、何かの役にたつかもしれん。……さあ、フューイ！」

男はくちびるを鳴らして、カシタンカに手であいずした。つま

り、《行こうぜ！》という意味なのだ。カシタンカは歩きだした。半時間とたたないうちに、カシタンカは大きな明るい部屋の床にすわって頭をかしげながら、テーブルに向かって食事をしていく見知らぬ男を、まじまじと見つめていた。男は食事をしながら、いくきれかの食べ物をカシタンカに投げてくれた。……まずはじめが、パンと、チーズの緑色になったかたい皮、それから、肉の切れはしや、肉まんじゅうの半かけや、めんどりの骨などをくれたが、カシタンカは、たださえひもじくてたまらないところだったので、味わうひまもないほど早く、みんなぺろりとたいらげってしまった。そして食べれば食べるほど、ますますおながすいきた。

「まえの主人のところじゃ、ろくろくごちそうにもありつけなかつたとみえるな！」と、見知らぬ男は、カシタンカがよくかみもしないで、ががつのみこむのを見ながら、言った。「それにまあ、お前のやせつぽちなこと！ 骨と皮ばかりじゃないか！……」

カシタンカはずいぶん食べたけれど、まだまだ食べたりのなかつた。ただ食べ物によつたようになったただけだった。食事がすむと、カシタンカは部屋のまんなかに寝そべって足をのばし、からだじゆうにこころよいつかれをおぼえながら、しつぽをふり始めた。

赤犬は、新しい主人がふかぶかとひじかけいすに腰をおろして葉巻をふかしているあいだに、しつぽをふりながら、この見知らぬ男のところと、さしもの師のところと、どっちがいいかという問

題を考えてみた。見知らぬ男のところは、なんとなくみすぼらしくて、きれいではない。ひじかけいすと、ソファアと、ランプと、じゆうたんのほかには、なんにもないし、部屋じゆうがいやにがらんとしているような気がする。さしもの師のところだと、うちじゆうに、いろんなものがところ狭しとおかれている。テーブルもあれば、仕事台もある。かんなくずの山だの、かなだの、のみだの、のこぎりだの、ひわを入れた鳥かごや、たらいまである。……見知らぬ男の家は、なんのにおいもしないが、さしもの師の住まいには、いつも霧がたちこめていて、にかわや、にすや、かんなくずのにおいが、景気よくただよっている。そのかわり、見知らぬ男のところには、一つとびきりいいところがある。——そ

れは、食べ物をもつさりくれそうなことだ。そして彼のために、ぜひひとこと言っておかなければならないが、カシタンカがテールの前にすわってあまえるように男を見あげていたときも、一度もぶたなかつたし、足をふみ鳴らしたり、《あっちへ行け、このいやしんぼうめ！》などとわめいたりもしなかつた。

葉巻をすいおわると、新しい主人はちよつと部屋を出て行つたが、すぐに小さいふとんを両手にかかえてもどつてきた。

「さあ、わん公、ここへおいで！」と、ソファアのそばへふとんをおきながら、言つた。「この上に乗つて、おやすみ！」

それから見知らぬ男は、ランプを消して出て行つた。カシタンカはふとんの上に横たわつて、目をつぶつた。——通りのほうで

犬のほえる声が聞こえた。カシタンカは、それに答えようとしたが、ふいにそのとき、言いようのない悲しみがこみあげてきた。カシタンカは、ルカー・アレクサンドルイチや、せがれのフェジューシカや、仕事台の下のいごこちのよい場所を思いだしたのだ。……長い冬の夜、さしもの師がかななをかけたなり、声をたてて新聞を読んだりしているとき、よくフェジューシカが、自分をあいてにふざけたことが思いだされた。……フェジューシカは、たびたびカシタンカのと足をつかんで、仕事台の下から引きずりだし、目がまわって、体じゅうの関節がずきずきいたむほど、いろいろないたずらをした。あと足で歩かせたり、鐘のまねをさせる。つまり、しっぽを力いっぱい引っぱって、きやんきやん鳴かせて

みたり、タバコをかがせたりする。……とりわけ、苦しくてやりきれなかったのは——フェジューシカが糸のはしに肉の切れっぱしを結びつけて、カシタンカに食べさせ、カシタンカが十分のみこんだのを見ると、大声で笑いながら、胃の中から引っぱりだすことだった。こんなことをありありと思いだせばだすほど、カシタンカはいよいよ大きな声で、悲しそうにくんくん鳴くのがあった。しかしまもなく、疲れと暖かさが、悲しみにうち勝った。……

カシタンカは、うとうとし始めた。夢うつつの中を、なん匹もの犬が走って行く。その中に、きょう通りで見かけた、白そこひにかかり、鼻のまわりに毛のふさふさはえた、よぼよぼのむく犬もいた。フェジューシカがのみを片手に、このむく犬を追っかけて

行く。と、こんどはとつぜん、フェジューシカがふさふさした毛におおわれて、楽しそうにほえながら、カシタンカのそばにあらわれた。カシタンカとフェジューシカは、なかよく鼻をかぎあつてから、通りを走つて行つた。

三 新しい、とても愉快的な知りあい

カシタンカが目をさましたときには、もうあたりはすっかり明るくなつていて、往来からは、昼間でなければ聞こえないようなざわめきが聞こえていた。部屋の中には、誰もいなかった。カシタンカは、ぐつと、一つのびをした。あくびをすると、おこつた

ような、気むずかしい顔をして、部屋の中を歩いた。部屋のすみずみや家具をかいでまわり、玄関までのぞいてみたが、べつにこれといっておもしろいものは、一つも見あたらなかった。部屋には、玄関へ通じる扉のほかにもう一つ扉があった。カシタンカは、ちよつと考えてから、その扉を二本の前足でおしあげ、つぎの部屋へはいった。その部屋の寝台の上には、ラシヤの毛布にくるまった、ひとりの《お得意さん》がねむっていた。カシタンカは、ひと目で、そのお得意さんがゆうべの見知らぬ男だと気がついた。

「うとうとう……」——カシタンカはうなりかけたが、ゆうべの晩ごはんのことを思いだしたので、しつぽをふって、くんくんかぎ

始めた。

見知らぬ男の服や靴のにおいをかいでみると、馬のにおいがぶんぶんしているのに気がついた。この寝室にも、やはり閉まった扉が一つあって、どこかへ行けるようになっていた。カシタンカはその扉を前足でひっかいたり、胸をもたせかけたりしておしあけた。すると、とたんに、妙な、なんだかふしぎなおいが、ぷんと鼻をついた。カシタンカは、なんとなく、いやなあいてと出あいそうな気がしたので、うなったり、あたりを見まわしたりしながら、壁紙のよごれた、その小さな部屋に足をふみこんだが、そのとたんに、思わずぎよつとして、たじたじとなった。思いがけない、おそろしいものを見たのだ。首と頭を床すれすれにまげ、

つばさをいっばいにひろげて、しゅうしゅう言いながら、一羽のがちようが、カシタンカめがけてまつしぐらにつき進んでくる。がちようからすこしはなれた小さなふとんの上には、一匹の白ねこが横になっていた。ねこは、カシタンカを見ると、とび起きて、背中を弓なりにまげ、しつぽをぴんと立てて、毛をさか立て、負けずにふうふう言い始めた。赤犬は、すっかりどぎもをぬかれたが、それでも恐ろしきを見せまいと気ばつて、大声でほえながら、ねこにとびかかった。……ねこはいっそう背中を弓なりにまげて、ふうふううなり始め、いきなり一方の前足をあげて、カシタンカの頭をなぐりつけた。カシタンカはとびのいて、ぺたんと腹ばいになり、ねこのほうに鼻^{はなづら}面をつきだして、わんわんほえ始めた。

すると、そのとき、がちようがうしろからそつと近づいて、いやというほど、くちばしで背中をつついた。カシタンカははね起きて、がちようめがけて、つつかかった。……

「こら、何を始めたんだ？」というぷりぷりした大声がして、葉巻をくわえた、寝巻すがたの、あの見知らぬ男が部屋へはいつてきた。

「なんというぎまだ！ 静かにしろ！」

見知らぬ男は、ねこに近づくと、弓なりにまげた背中を軽くたたきながら言った。

「フョードル・チモフェーイチ！ どうした？ けんかを始めたんだな？ しょうのないおいぼれめ！ さあ、寝た、寝た！」

それから、見知らぬ男は、がちようのほうへ向きなおって、どなった。

「イワン・イワーヌイチ、静かにしろ！」

ねこは、おとなしく自分の小さなふとんの上に横になって、目をつぶった。その顔つきや、ひげのようすからみると、どうやら自分でも、つかつかとなつて、けんかを始めたことを後悔しているらしかった。カシタンカは、腹だたしそうに鼻を鳴らした。一方、がちようは首をのばして、何やら早口にもうれつな勢いでしゃべり始めた。その言葉ははっきり聞きとれたが、ちんぷんかんぷんでなんのことやらわからなかった。

「よし、よし！」と、主人はあくびをしながら言った。「おとな

しく、なかよく暮らすんだぞ。」——それから、彼は、カシタン力をなでながら、つづけた。「なあ、おい、赤、こわがることはないさ。……みんな、いいやつばかりなんだから、おまえに悪さはしないよ。ときに、待てよ、おまえをどう呼ぶことにしようかな？ 名なしのごんべえじゃこまるからな。」

見知らぬ男は、ちよつと考えてから、言つた。

「そうだ。……《おばさん》にしよう。……いいかい？ おばさん！」

そして見知らぬ男は、なんども《おばさん》という言葉をくりかえしてから、出て行つた。カシタン力はすわつて、あたりのようすをうかがい始めた。ねこは小さなふとんの上にじつとうずく

まって、寝たふりをしていたが、がちようは、あいかわらず首をつきだし、ひととところで足ぶみしながら、何やら早口に、熱心しやべりつづけていた。見たところ、これはたいそう利口ながちようらしかった。がちようは、ひとくだりの長い文句をいつきしやべりおわるたびに、いつも、びつくりしたようにあとずさりして、われながら自分の演説にはほればれするというふうをしてみせた。……カシタンカはしばらくがちようの演説を聞いてから、《うううう……》と答えておいて、部屋のすみずみをかぎ始めた。あるすみに小さな桶おけがおいてあって、中には水につけたえんどう豆と、ふやけたはだか麦の皮が見えた。カシタンカは、まずえんどう豆を一口毒味を試みたが、義理にもおいしいとは言えなか

つたので、はだか麦の皮をつついてみて、食べ始めた。がちようは、見知らぬ犬が、自分のえさをぱくぱく食べるのを見ても、腹をたてるどころか、反対に、いつそう熱心にしゃべり始め、わがは我輩は、もう君をすっかり信用しているからね、とでも言うように、桶のところへちよこちよこ近づいて来て、いつしよにえんどう豆をいく粒かついばんだ。

四 ふしぎなけいこ

しばらくすると、ロシア語のП^{ペー}という字によく似た、門のような形の妙なものを持って、またさっきの見知らぬ男がはいつてき

た。この木と木を簡単に打ちつけたⅡの字の横木には、鐘が一つぶらさげてあつて、べつにピストルが一ちよう結びつけてあつた。そして鐘の舌とピストルの引ひきがね金からは、細いひもがたれさがつていた。見知らぬ男は、このⅡの字を部屋のまんなかを立てて、長いあいだしきりに何か結んだりほどこいたりしていたが、それがおわると、がちようのほうを見て言った。

「さあ！ イワン・イワーヌイチ。」

がちようは、見知らぬ男に近づいて、つぎの命令を待ちかまえた。

「さて」と、見知らぬ男は言った。「きようは、いちばんはじめから始めよう。まず、おじぎをして、それからごあいさつだ！」

そら！」

イワン・イワーヌイチは首を前へのばし、右足をちよつと引いて、四方へぺこぺこおじぎをし始めた。

「よし、えらいぞ！……こんどは、死ね！」

がちようはあおむけに寝て、両足を上へ持ちあげた。見知らぬ男は、それからもいくつかのそういうやさしい芸当をやらせてから、ふいに頭をかかえると、さもおそろしくてたまらないような顔をして、こう叫んだ。

「番人！ 火事だ！ もえている！」

すると、イワン・イワーヌイチは、やにわに口くちの字じにかけよつて、ひもをくちばしにくわえ、がらんがらんと鐘を鳴らし始めた。

見知らぬ男は、すっかり満足した。彼は、がちようの首をなでながら、言った。

「えらいぞ！ イワン・イワーヌイチ！ さあ、こんどは宝石屋になるんだ。金だのきんダイヤモンドを売っている。おまえが店へ来てみたら、泥棒がはいつている。そしたら、おまえはどうする？」

がちようは、もう一本のひもをくちばしにくわえて引っぱった。同時に耳がさけるほど大きな音がとどろいた。この音は、ひどくカシタンカの気に入った。赤犬はピストルの音を聞くと、喜びいさんで、Πの字のまわりを走りながら、ほえ始めた。

「おばさん、出ちやいけない！」と、見知らぬ男は叫んだ。「おだまり！」

イワン・イワーヌイチのけいこは、この射撃でおわったのではなかった。それからまる一時間ほど、見知らぬ男は、がちようにひもをつけて自分のまわりを追いまわしながら、むちでたたいた。そのたびにがちようはさくをとびこえたり、輪をくぐりぬけたり、あと足で立つ、つまり、しっぽで立つて両手をふったりしなければならなかった。カシタンカは、イワン・イワーヌイチをじっと見つめたまま、うれしくなって、うなったりかん高い叫びをあげて、なんどかがちようのうしろから走りだしそうになった。がちようも疲れ、自分も疲れてくると、見知らぬ男は、ひたいの汗をふきながら、叫んだ。

「マーリヤ、ハヴローニヤ・イワーノヴナをつれておいで！」

まもなく、ぶたの鳴き声が聞こえてきた。……カシタンカは、うなりながら、さも勇ましそうなふりをして、万一の用意に、そつと見知らぬ男のそばへよりそつた。扉が開くと、ひとりのばあさんが部屋の中をのぞいて、なにやら二こと三ことしゃべつてから、まつ黒な、ひどくみつともないぶたを部屋へ入れた。ぶたは、カシタンカのうなり声には目もくれず、鼻を天井に向けて、陽気にぶうぶう鳴き始めた。どうやら、このぶたは、主人や、ねこや、がちょうのイワン・イワーヌイチにあうのが、とてもうれしかったらしい。おまけに、ねこのそばへよつて、鼻のさきで腹を軽くとんとつき、それから、がちょうとなにやら話し始めたときのその身ぶりといい、声といい、しつぽのふりぐあいといい、なかなか

か気さくな女と見える。カシタンカは、すぐにこういう手あいをあいてに、うなったり、ほえたりするのはむだなことだとさつとつた。

主人は、 Π の字をかたづけ^{ペー}てから、叫んだ。

「さあ、フヨードル・チモフェーイチ！」

ねこは起きあがると、うるさそうにのびを一つして、やってやるよと言わないばかりに、しぶしぶたのところへ近づいた。

「さあ、エジプトのピラミッドから始めよう！」と、主人は声をかけた。

そして、彼はなにやら長いこと説明をしてから、《一……二……三！》と号令をかけた。イワン・イワーヌイチは、《三》をあ

いずに、一つばさつとはばたいて、ぶたの背中へとびあがった。
……がちようがつばさと首で体のつりあいをとつて、いちめんに
かたい毛のはえたぶたの背中にしつかりととまると、こんどは、
フョードル・チモフエーイチが、みるからに人をばかにしきつた、
もともと、我輩は、自分のこんな芸なんか軽蔑しているんだ、こ
んなことには、いちもん一文の値打もみとめやしない、とでも言うよう
なようすで、のろのろと、さもめんどろくさそうにぶたの背中へ
はいあがり、それから、しぶしぶがちようの背中へよじのぼつて、
あと足で立った。つまり、これが、あの見知らぬ男の言う、エジ
プトのピラミッドらしい。カシタンカは、有頂天になって、思わ
ず、わんとほえたが、おりもおり、ねこのじいさんが、大きなあ

くびを一つやらかしたので、たちまち体のつりあいをうしなつて、がちようの背からころげ落ちた。そのはずみに、イワン・イワーヌイチもよろけてころげ落ちた。見知らぬ男は大声でどなつて両手をふり、また何か説明し始めた。このピラミッドのけいこにまゐるまる一時間もかけると、疲れを知らない主人は、イワン・イワーヌイチに、ねこに乗つて歩くことを教え始め、それから、ねこにタバコのすいかたを教えたり、そのほか、いろんな芸を教え始めた。

やつこのことで、このけいこがおしまいになると、見知らぬ男はひたいの汗をふいて出て行き、フョードル・チモフェーイチは不愉快そうにふうと息をはいて、ふとんの上に横になつて目をと

じた。イワン・イワーヌイチは、餌えさの桶のほうへよちよち歩いて行き、ぶたは、ばあさんがつれて行つた。このたくさんな新しいできごとのおかげで、その日は、カシタンカの知らないうちにすぎ去つた。晩になると、カシタンカは小さなふとんといっしよに、この壁紙のよごれた小部屋へうつされて、そこで、フョードル・チモフェーイチや、がちようともども、一夜を明かした。

五 天才！ 天才！

一カ月たった。

カシタンカは、まい晩おいしいごちそうを食べることに、

《おばさん》と呼ばれることにもすつかりなれた。あの見知らぬ男にも、新しい友だちにもなれた。おだやかな暮しがつづいた。

くる日もくる日も、同じように始まった。いつもまつさきにイワン・イワーヌイチが目をさまし、すぐに、おばさんかねこのところへ近づいて、首をのぼし、あいかわらずちんぷんかんぷんなことを、熱心に、一生けんめいしゃべり始めた。ときにはまた、頭を持ちあげて、長つたらしいひとりごとをしゃべりちらすこともあった。がちようと知りあつた最初の二、三日こそ、カシタン力は、こんなにいろんなことをしゃべるところをみると、さぞかし利口ながちようにちがいないと思つたが、いくらもたたないうちに、がちように対していだいていた尊敬の気持をすつかりうし

なつてしまった。それからというものが、がちようが長つたらしい演説をぶちながらそばへよつて来ても、カシタンカは二度としつぽをふらないで、人のねむりの邪魔をするうるさいほらふきめと言わんばかりに、鼻のさきであしらい、えんりよなく《うううう》と返答してやることにした。……

がちようとちがつてフヨードル・チモフェーイチは、ひとかどの紳士だった。彼は目をさましても、物音ひとつたてもしななければ、身動きもせず、おまけに目をあけさえしなかつた。そればかりか、できることなら、そのままいつまでも、目をさまさないでいたかつたらしい。というのは、ねこはこの世の暮しがあまり好きではないようにみえたからである。何ひとつ、彼は興味を持た

ないし、どんなことをするにも、のろのろともものぐさそうで、何もかも軽蔑しきって、自分にあてがわれたおいしい食べ物を食べるときでさえ、さもめんどろくさそうに、ふうふう言うのだった。

カシタンカは目をさますと、いつも家じゆうを歩きまわって、すみずみをかぎ始めた。うちじゆうを歩きまわるのをゆるされていたのは、カシタンカとねこだけだった。がちようは、壁紙のよごれた部屋のしきいをまたぐ権利を持っていなかったし、ぶたのハヴローニヤ・イワーノヴナは、どこか庭さきの納屋のあたりに住んでいて、けいこのときにしか顔を見せなかった。主人は朝寝ぼうだったが、お茶を飲むと、すぐにご自慢の芸当にとりかかった。まい日、 Π ^{ペー}の字や、むちや、輪が部屋に運びこまれ、まい日、

ほとんど一つのことがあきもせずにくりかえされた。けいこは、いつも三時間から四時間、ぶつとおしにつづけられた。それどきには、フョードル・チモフェーイチが疲れきって、酔ったようにふらふらになり、イワン・イワーヌイチがくちばしをあげたまま、苦しそうにあえぎ、主人は主人で、まっかになつて、ひたいから流れる汗を、ふいてもふいてもふききれないでいることがあつた。

けいことごちそうのおかげで、昼間はとてもおもしろかったが、晩は、たいくつでたまらなかつた。たいてい晩になると、主人はがちようとねこをつれてどこかへ出かけて行つた。ひとりきりになると、おばさんは小さなふとんの上に横になつて、悲しみにく

れる。……言いようのない悲しさが、知らず知らずのうちに、カシタンカのそばへしのびよってきて、夕やみが部屋をうずめつくすように、しだいしだいにカシタンカの心をいっぱいにする。まずはじめに、ほえることも、食べることも、うちじゆうを走りまわること、あらゆる心のはたらきが消えてしまう。するとこんどは、カシタンカの頭の中に、二つのぼんやりしたまぼろしがあらわれる。——それは、気持のいい、愛くるしい顔つきをしているが、まるで雲をつかむようで、犬だか人だか見わけがつかない。このまぼろしがあらわれると、おばさんはしつぽをふる。なんとなく、いつかどこかで出あったことがあって、自分が愛していたような気がする。……そして、カシタンカは、うとうとしながら

も、いつもきまつてそのまぼろしから、にかわや、かんなくずや、にすのにおいがただよふのを感じる。……

カシタンカが新しい暮しにすっかりなじみ、今までのやせた、骨ばかりの犬とは似ても似つかない、まるまるふとつた、あまやかされた犬になり変わったある日のこと、主人はけいこのまえに、やさしくなでながらこんなことを言った。

「おばさんや、おまえもそろそろ仕事を始めるときがきたようだね。もう、それぐらいぶらぶらすればいいだろう。わしは、おまえを女優にしようと思うんだが。……どうだい、ひとつ、女優にならんかね？」

そして主人は、いろいろな芸をカシタンカに教え始めた。最初

の課目では、まずあと足で立つて歩くことをならった。これは、ひどくカシタンカの気に入った。第二の課目にはいると、あと足でとびあがって、先生が頭のずっと上に持っている砂糖を口で取らなければならなかった。それがすむと、おどったり、綱で引っぱられたままぐるぐる走りまわったり、音楽にあわせてほえたり、鐘を鳴らしたり、ピストルをうったりした。そして、一月もたつと、《エジプトのピラミッド》で、フォードル・チモフェーイチのかわりを上手につとめられるほどになった。カシタンカはいそいそとけいこにはげんだし、うまくやりとげるとうれしくてたまらなかつた。綱で引っぱられたまま、舌をだらりとたらしして走りまわることも、輪をくぐりぬけることも、年よりのフォードル・

チモフェーイチの背中に乗って歩くことも、カシタンカにとつては生まれてはじめてあじわう楽しみだった。こういう芸当をうまくやってのけるたびに、カシタンカは、たかだかと勝ちほこつたようにほえた。主人はびっくりして、有頂天になり、しきりに手をこすつて叫んだ。

「天才だ！ 天才だ！ ほんとうの天才だ！ 成功うたがいなしだ！」

おばさんはこの《天才》ということばを、あまりなんども聞かされたので、主人がこのことばを口にするたびにとびあがつて、まるで、それが自分の名まえでもあるみたい、きよろきよろあたりを見まわすのだった。

六 不安な一夜

おばさんは、——犬はやっぱり犬だから——こんなみじめな夢を見ていた。ほうきを持った門番が、うしろから追っかけてくる。おばさんは、おそろしさに目をさました。

部屋は、静かで、暗くて、ひどくむんむんしていた。のみがさした。これまでおばさんは、やみをおそれたことなんか一度だつてなかったが、このときは、なんとなくうす気味がわるくて、やたらにほえたかった。となりの部屋で、主人が大きなため息をついた。しばらくすると、納屋の中でぶたが鳴いた。それっきり、

あたりはまたしんと静まりかえった。食べ物のことを考えると、気がやすまってくるので、おばさんは、きようフョードル・チモフエーイチのにわたりの足を失敬して、くもの巣とほこりのどつさりたまつた客間の戸だなと壁のすきまへかくしたことを思いだした。あのにわたりの足がまだそのままあるかどうか、今行つてみる事ができたらなあ！ きつと主人が見つけて食べてしまつたにちがいはあるまい。——しかし朝になるまでは、部屋から出たはならないきまりになつていた。そこでおばさんは、すこしでも早く寝つこうと思つて目をつぶつた。早く寝ればそれだけ早く朝になるということを経験から知つていたのだ。するとふいに、近くで妙な悲鳴が起こつた。おばさんは思わず身ぶるいしてとび起

きた。それは、イワン・イワーヌイチの悲鳴だった。が、ふだんの長つたらしい、言い聞かせるような調子ではなくて、どこなくあらあらしい、さすような不自然な叫び声で、門をあけるときの戸のきしむ音そっくりだった。やみのために何ひとつ見わけられず、何が何だかわからなかった。おばさんは、よけいこわくなつてきて、うなつた。――

「うううう……」

上等な骨をしゃぶるほどのちよつとした時間がすぎた。――それつきり悲鳴は聞こえなかった。おばさんは、だんだんおちつきをとりもどしてきて、うとうとしだした。腰と腹のあたりに、去年の毛がもじやもじやはえた二匹の大きい黒犬の夢を見た。黒犬

は、大きなたらいから、白い湯気とおいしそうなおいの立ちのぼつているおあまりを、ががつ食べていた。ときどき彼らは、おぼさんのほうをふりかえつて、齒をむいて、《君にや、やらないよ!》とうなつた。すると、家の中から、外套を着たひとりの百姓がかけだしてきて、むちで黒犬を追いはらつた。そのすきにおぼさんはたらいに近づいて食べ始めたが、百姓が門の向こうへ去るが早いから、二匹の黒犬がほえたてながら、カシタンカにとびかかった。——そのとき、ふいにまた、さすような悲鳴が起こつた。

「ぐえつ!　ぐえつ・ぐえつ!」——イワン・イワーヌイチが叫んだのだ。

おばさんは、目をさましてとび起きると、ふとんの上に乗ったままほえ始めた。おばさんには、イワン・イワーヌイチが叫んだのではなくて、誰かよその見知らぬ者が叫んだような気がしたのだ。すると、なぜかまた、納屋でぶたが鳴いた。

そのとき、スリツパの音がして、寝巻すがたの主人がろうそくを持って部屋へはいつてきた。ちらちらまたたく光が、よごれた壁紙の上や天井をはねまわって、やみを追っばらった。おばさんは、部屋の中によその見知らぬ者などだれもないのを見とどけた。イワン・イワーヌイチは床にすわったまま、ねむらずにいた。彼はつばさをだらりとひろげてくちばしをあげ、見るからにぐつたりとして、水をほしがっているようなようすだった。フヨード

ル・チモフエーイチじいさんも、目をさましていた。たぶん彼も、さつきの悲鳴で起こされたのだろう。

「イワン・イワーヌイチ、どうしたんだね？」と、主人はがちようにたずねた。「何を叫んでいるんだ？　ぐあいでも悪いのかい？」

がちようは、だまっていた。主人は、ちよつとがちようの首にさわってみて、それから、背中をなでて言った。

「おかしなやつだなあ。自分も寝ないし、人も寝かせない。」

主人が出て行って、それといっしょにあかりが持ち去られると、ふたたび、やみがおしよせた。おばさんはこわかった。がちようは悲鳴をあげなかったけれど、またもやよその見知らぬ者が、や

みの中にじつと立っているような気がしてきた。なによりもいちばんおそろしかったのは、その見知らぬよそのやつが、影も形もなかったので、かみつこうにもかみつくことができなかつたことだ。そしてなぜかおばさんは、きつと今夜のうちに、どうしようもない何か悪いことが持ちあがるにちがいないと思った。フヨードル・チモフエーイチも、やつぱりおちつかないらしかつた。彼がふとんの上でござござやつたり、なまあくびをしたり、頭をふつたりする音が聞こえた。

どこか通りのほうで門をたたく音がして、納屋でぶたが鳴いた。おばさんは、鼻を鳴らして前足をのぼし、その上に頭をのせた。門をたたく音にも、なぜか、寝つかれないでいるぶたの鳴き声に

も、やみの中にも、静けさの中にも、おばさんはイワン・イワーヌイチの悲鳴を聞いたときと同じもの悲しさ、おそろしさを感じた。何もかもが、ざわざわしておちつかなかつた。なぜだろう？

それにまた、あの目に見えないよその者は、いったいだれなのだろう？……と、そのとき、おばさんのすぐま近ぢかで、ぼうつとした緑色の火花が二つ、一瞬ぱつともえあがつた。それは、フョードル・チモフェーイチが知りあいになってからはじめて、おばさんのそばへよりそつてきたのである。なんの用だろう？ おばさんは、ねこの足をなめてから、よりそつてきたわけはきかないで、そつといろんな声でうなり始めた。

「ぐえっ！」——ふいに、イワン・イワーヌイチが叫んだ。「ぐ

えっ・ぐえっ！」

するとまた扉があいて、ろうそくを持った主人がはいってきた。がちようは、くちばしをあげ、つばさをひろげたまま、まえと同じ姿勢ですわっていた。目は、つぶったままだった。

「イワン・イワーヌイチ！」と、主人は呼んだ。

がちようは身動きひとつしなかった。主人は、向かいあつて床にすわり、だまつたまましばらくがちようを見て言った。

「イワン・イワーヌイチ！ どうしたのさ？ 死ぬのかい？……

ああ、そうか、やつと思いだしたよ！」——主人は、こう叫んで自分の頭をつかんだ。「なるほど、そうだったなあ！ きよう、馬にふんづけられたからなあ！ ああ、ああ！」

おばさんは、主人が何を言っているのかわからなかったけれど、主人の顔つきから、彼が何かおそろしいことを待ち受けているのを知った。おばさんは暗い窓のほうへ鼻面をつきだしてほえ始めた。その窓から、れいの、よその見知らぬ者が、のぞいているような気がしたのだ。

「おばさん、こいつは死にかけてるんだぞ！」と、主人は言つて、手を打ちあわせた。「そうだ、そうだ、死にかけているんだ！

おまえたちのところへ、この部屋へ、《死に神》がやって来たんだ。ああ、どうすりゃいいんだ？」

青ざめておろおろした主人はため息をついて、頭をふりながら自分の寢室へもどった。おばさんはやみの中に残るのが気味わる

かったので、主人について行った。主人は寝台に腰をおろして、なんどもくりかえしてこう言った。――

「ああ、どうすりやいいんだ？」

おばさんは、主人の足もとを行ったり来たりして、どうしてこんなに気がめいるのか、なぜこんなにみんなが不安そうにしているのか、まるでわけがわからないけれど、なんとかしてそのわけを知ろうとして、主人のようすをいちいちじつと見守っていた。めったに自分のふとんをはなれないフォードル・チモフェーイチまでが、主人の寝室へやってきて、主人の足にからだをすりつけた。ねこは、重苦しい考えを頭からふり落とそうとでもするように、頭をふつていぶかしそうに寝台の下をのぞきこんだ。

主人は小さな皿を取つて、水さしから水をつぐと、またがちよ
うのところへとつてかえした。

「さあ、お飲み、イワン・イワーヌイチ！」皿をがちよの前にお
おきながら、主人はやさしく言った。「さ、お飲み、いい子だか
ら。」

けれども、イワン・イワーヌイチは身動きひとつしななければ、
目をあけもしなかつた。主人はがちよの頭を皿のほうへまげて、
くちばしを水につけてやったが、それでも飲まないで、ただつば
さをいっそうひろげたばかり。——そして、そのまま頭を皿の中
にがつくりと落としてしまった。

「だめだ、もうどうしようもない！」——主人は、ほっとため息

をついた。「万事休すだ。イワン・イワーヌイチは死んでしまつた！」

言いおわると、主人の両ほおを、雨ふりの日に窓をつたわつて落ちるような、きらきら光るしずくが流れ落ちた。わけもわからないまま、おばさんとフョードル・チモフェーイチは、主人によりそつて、おそるおそるがちようを見つめていた。

「かわいそうな、イワン・イワーヌイチ！」——悲しそうにため息をつきながら、主人が言った。

「春になったら、別荘へつれて行って、緑の草原を、おまえと散歩しようと思しみにしていたのに！　かわいいおまえ、なかよしだつたおまえは、もういないのだ！　ああ、おまえと別れて、こ

れから、おれはどうしてやっていけよう？」

おばさんは、いつか、これと同じことが、自分の身のうえにも起こるような気がした。つまり、いつか自分もまた、なぜだか知らないけれど、こんなふうに目をつぶって、足をのばして、口をあけるだろう、そして、みんながおそるおそる自分のすがたに見えるだろう。……どうやら、フョードル・チモフェーイチの頭にも、同じような考えが浮かんでいたらしい。この年とつたねこが、こんなに陰気くさい、暗い顔をしていたことは、今まで一度もなかった。

夜が明け始めた。あれほどおばさんをおどかした、目に見えない見知らぬ者は、もう部屋の中にはいなかった。すっかり明るく

なると、門番がやってきて、がちようの足をつかんで、どこかへ持って行つた。しばらくすると、ばあさんがあらわれて、餌桶えおけを運びだした。

おばさんは、客間へ行つて、戸だなのうしろをのぞいてみた。にわとりの足は主人が食べなかつたとみえて、あのままほこりたくもの巢にまみれてころがつていた。しかしおばさんは、気がめいるやらもの悲しいやらで、むしように泣きたかつた。カシタン力は、にわとりの足のおいをかごうとしないで、ソファアの下にもぐりこんで、そこへ腰をおろすと、そつとか細い声で鳴きだした。——「くん・くん・くん……」

七 さんざんな初舞台

ある日の夕がた、壁紙のよごれた部屋へ主人がはいつて来て、もみ手をしながら、言った。

「さあ……」

彼は、あとをつづけようとしたが、言わないで出て行った。けいこのあいだに主人の顔つきや声の調子をすつかりのみこんでいたおばさんは、主人が興奮して、やきもきして、なにかじりじりしているらしい、と気づいた。しばらくすると、主人がもどってきて、言った。

「きようは、おばさんとフョードル・チモフエーイチをつれて行

く。エジプトのピラミッドでは、おばさん、きょうは、おまえが死んだイワン・イワーヌイチの代役をつとめるんだ。ちえつ、どうなることやら！ 準備ひとつしちやいないし、ろくろく教えてもありやしない、まったく練習不足だ！ 恥をかかなきやいいが、しくじらなきやいいがな！」

そう言うのと、主人はまた出て行つたが、すぐにこんどは、毛皮の外とうを着て、山高帽をかぶってひきかえしてきた。彼はねこに近づくと、前足をつかんで持ちあげ、外とうの胸の中へかくした。そのあいだもフォードル・チモフェーイチは、いたって平気なもので、目をあげようとしなかった。彼にとつては、横になつていようと、足をつかんで持ちあげられようと、ふとんの上にな

寝ころがっていようと、主人の外とうの胸にぬくぬくとおさまっていようと、まるで同じことだったらしい。……

「おばさん、行こう」と、主人が言った。

何もわからないけれど、おばさんはしつぽをふって、主人のうしろからついて行つた。まもなくおばさんは、その中で主人の足もとにすわって、主人が寒さと興奮に身をひきしめながら、つぶやくのを聞いていた。

「恥をかかなきやいいが！　しくじらなきやいいがな！」

そりは、スープ入れをさかさにしたような、大きな、妙な家のそばにとまった。このうちの長い車よせには、ガラスのとびらが三つあって、一ダースもある明るい燈火が、あかあかともつて

いた。扉が音をたてて開くたびに、まるで口のように、車よせのそばをうろうろしていた人びとをのみこんだ。たいへんな人で、車よせへはたびたび馬もかけつけたが、犬は一匹も見あたらなかった。

主人はおばさんを両手でだきあげて、フョードル・チモフェーイチのいる外とうの胸の中へおしこんだ。そこは、暗くてむっと暖かかった。一瞬、緑色のぽうつとした火花が二つ、ぱっともえあがった。——それは、おばさんのつめたいごつごつした足におどろいたねこが、目をあけたのだ。おばさんは、彼の耳をなめてから、できるだけぐあいよくすわろうと思つて、ごそごそ動いているうちに、つめたい足で、ねこをふみつけて、そのはずみに、

思いがけなく、外とうの下から頭をだしてしまったが、すぐにおこつたようになって、外とうの下へもぐりこんだ。——瞬間、怪物のいつぱいいる、だだっぴろい、うす暗い部屋を見たような気がしたのだ。部屋の両がわのしきりやさくの向こうから、馬の顔や、角のはえた顔や、耳の長い顔や、鼻のかわりにしつぽがはえ、口からむきだしの長い二本の骨がつき出ている、ふとつた、ばかでかい顔など、いろいろなおそろしい顔が、こつちをのぞいていたのである。

ねこはおばさんの足の下で、にやあにやあしわがれ声をあげ始めたが、ちょうどそのとき、外とうの前があいて、主人が《おりろ！》と言つたので、フョードル・チモフェーイチとおばさんは、

いつきに床の上にとびおりた。そこはもう、灰色の板壁にかこまれた小さな部屋の中だった。この部屋には、鏡をのせた小さなテーブルと、腰かけと、部屋のすみずみにぶら下げたぼろをのぞいては、家具と名のつくものは何ひとつなく、ランプやろうそくのかわりに、壁に細い管を打ちつけて、そのさきに明るいおおぎ形の燈火をとりつけてあった。フョードル・チモフェーイチは、おばさんにふみつけられた自分の毛皮外とうをひとしきりなめまわしてから、腰かけの下へはいつて横になった。主人はあいかわらず興奮して、しきりにもみ手をしながら、着がえにかかった。：

：彼は、いつも家で、あらラシヤの毛布をかぶって寝るまえに、着がえをするときのように、下着一まいになってから、腰かけに

すわって、鏡をのぞきながら妙なことをし始めた。まずさいしよに、髪のわけめと、角のような前髪が、二つついたかつらを頭にかぶり、それから顔じゆうまつ白にぬって、その白いおしろいの上に、まゆ毛や、口ひげや、赤いもようをかいた。彼のおめかしは、それだけではなかつた。顔と首の細工がおわると、こんどはちんちくりんな、おかしな服を着始めた。おばさんは今までそんな服を、うちの中でも、通りでも、一度も見たことがなかつた。

まあ、おそろしく幅の広いズボンを想像していただければいい。——よく町人の家で、窓かけや、家具のおおいに使われるような、大きな花もようのサラサでぬってあつて、わきの下で、ボタンをかけるようになってゐる。そして一方の足が褐色で、もう一方が

うす黄色なのだ。主人はこのズボンの中に、すっぽりはいると、大きなぎざぎざのえりと、背中に金の星のついたサラサのジャケツを着て、色とりどりの長靴下と緑色の靴をはいた。……

おばさんは、目がちらついて気がへんになってきた。たしかに、このまっ白い顔をしただぶだぶな服を着た人からは、主人のにおいがしたし、声も聞きなれた主人の声だったが、ときどきひよつと疑わしくなってきた。このまだらの人から逃げだして、ほえようとすることがあった。見なれない場所、おおぎ形のあかり、に
おい、主人の変装——こうしたことが、すべておばさんにわけのわからないおそろしさをいだかせ、きつとこれから、あの鼻のかわりにしっぽを持った、ふとつた顔みたいな、おそろしいばけも

のに出あうにちがない、という気がした。おまけに、壁の向このどこか遠くで、むかむかする音楽が鳴っていて、ときどきわけのわからないほえ声が聞こえた。ただ一つおばさんを安心させたのは——フォードル・チモフェーイチが平気でいることだった。彼は腰かけの下でゆうゆうとねむっていて、腰かけが動いても、目をあけようとはしなかった。

フロツクを着て、白いチョツキをつけたひとりの男が、部屋ののぞいて言った。

「今、ミス・アラベラが出ています。つぎは——あなたですよ。」
主人は、何も答えなかつた。彼はテーブルの下から小さな旅行カバンを取りだし、腰をおろして待ち始めた。くちびると両手か

ら、彼がそわそわしているのがわかった。おばさんは、主人の息がふるえているのを聞いた。

「ミスター・ジョージ、どうぞ！」——扉の向こうでだれかが叫んだ。

主人は立ちあがって、三度、十字を切り、腰かけの下からねこを引きだして、カバンの中へ入れた。

「おばさん、おいで！」と、主人は小声で言った。

おばさんは、何もわからなかったが、主人の手のそばへ近づいた。主人は、おばさんの頭にキツスをして、フョードル・チモフエーイチのいるカバンの中へ入れた。と同時に、あたりがまっ暗になった。……おばさんは、ねこをふみつけたり、カバンの壁を

ひっかいたりしたけれど、おそろしさのあまり声をたてることさえできなかつた。カバンは、波の上をただようようにゆれて、ふるえた。……

「お待ちせいたしました！」と、大声で主人が叫んだ。「お待ちせいたしました！」

おぼさんは、この叫び声がおわると、カバンが何かかたいものにどしんとぶつかって、ゆれがとまったのを感じた。大きな、太いほえ声が聞こえた。拍手が起こつた。拍手のあいては、どうやらあの鼻のかわりに、しっぽのはえたみにくい顔のばけものらしく、カバンの小さな錠前がふるえたほど大きな声で、なおもほえたり笑ったりした。それに答えて、つきさすような、かん高い主

人の笑い声がひびきわたった。——それは、今までうちでは一度も聞いたことのない笑い声だった。

「はあっ！」——主人は、ほえ声を消そうとりきみながら、叫んだ。「親愛なるみなさま！ わたくしは、たった今、停車場からはせさんじました！ じつは、このたびわたくしのおばあさんが息をひきとりまして、ここに遺産を残してくれたのであります！

このカバンには、たいそう重いものがつまっております。——さてこそ金貨か……はあっ！ 思いもかけぬ百万両か！ では、ただ今、あけてごらんに入れます。……」

カバンの錠前が、かちと鳴った。明るい光が、おばさんの目を射た。おばさんは、カバンからとびだすと、わあわあいうほえ声

にぼうつとなつて、すばやく全速力で主人のまわりをかけまわりながら、きやんきやんほえだした。

「はあつ！」と、主人が叫んだ。「フョードル・チモフェーイチおじさん！ いや、これは親愛なるおばさん！ こりやどうも、とんだところへ出てきたもんだ！」

主人はがぼと砂の上にたおれるなり、ねことおばさんをつかまえて、だきしめようとした。おばさんは、主人にだきしめられているすきに、あたりのようすをちらりと見た。そしてあまりのすばらしさに、しばらくぼつとなつたが、やがて主人の腕からぬけだすと、一つところをこまのようにくるくるまわりだした。新しい世界は、すばらしくりっぱで、明るい光にみちみちていた。――

—どっちを向いても床から天井まで、どこもかしこも、ただ目うつるものは、顔、顔、顔、顔、だった。

「おばさん、どうぞおかけください！」と、主人が叫んだ。

おばさんは、この言葉をおぼえていたので、いすの上へとびあがってすわった。そして主人の顔をじっと見た。彼の目は、いつものようにまじめでやさしかったが、顔——とりわけ口と歯とは、大げさな、すこしも動かない微笑で、ひんまがっていた。そのうえ主人は、自分から大声で笑ったり、とびはねたり、肩をすくめたりして、さもなん千という人びとの前にいるのが楽しくてたまらないというふりをしていた。おばさんは、主人がしんから楽しくてたまらないのだと思った。すると、ふいに、このなん千とい

う人びとが、じつと自分を見つめているのをひしひしと感じて、きつねのような鼻面を高くあげ、さもうれしそうにほえ始めた。

「おばさん、あなたはすわってらっしゃい。」と、主人が言った。「おじさんとカマーリンスキイ（ロシアのおどりの名）をおどりますからね。」

フョードル・チモフェーイチは、このつまらないことが始まるのを待っているあいだ、じつとつつ立って、何くわぬ顔であたりを見まわしていた。彼は、のろのろと、ぞんざいに、気むずかしい顔をしておどった。その身のこなしや、しつぽとひげのぐあいから、彼が、群衆も、明るい光も、主人も、自分自身さえも、軽蔑しきっているのがわかった。……自分のぶんをおどりおわると、

彼はあくびをしてすわった。

「さあ、おばさん。」と、主人が言った。「まずふたりでうたつて、それから踊りましょう。いいですか？」

主人はポケットから小さな笛を取り出して吹き始めた。おばさんは音楽を聞くと、たまらなくなつて、いすの上をそわそわ動いてほえだした。四方八方から、ほえ声と拍手が起こつた。主人はおじぎをし、しずまるのを待つて吹きつづけた。……笛の音がひじょうに高くなつたころ、どこか二階の見物席のほうで、だれかが、大声であつと叫んだ。

「とうちゃん！」と、子どもの声が叫んだ。「あれは、カシタンカじゃないか！」

「そうだ、カシタンカだ！」と、よつぱらった、がさがさの高い声があいづちをうった。「カシタンカだ！ フェジューシカ、ありや、——ちえつ、しよのねえやろうめ、——カシタンカだぜ！ フューイ！」

だれかが、二階席で口笛を吹いた。子どもとおとなの二つの声
が、大声で呼んだ。

「カシタンカ！ カシタンカ！」

おばさんは身ぶるいをして、声のしたほうを見た。ひげだらけの、よつぱらった笑い顔と、まるまるとふとった、ほつぺたの赤い、びつくりしたような顔とが、さつき明るい光が目を射たように、おばさんの目を射た。……おばさんははっと思いだした。そ

して、いすから下の砂の上に、もんどり打つてころげ落ちると、とび起きてうれしそうな叫びをあげながら、その二つの顔をめぐけてかけた。どつとわきあがるどよめきをつんざいて、口笛とするどい子どもの叫びがひびいた。

「カシタンカ！ カシタンカ！」

おばさんは、さくをとびこえ、だれかの肩をとびこえてさじきへとびこんだ。が、その上の席へはいるためには、高い壁をとびこえなければならなかった。おばさんはとびあがった。だが、とびたりなかったために、壁をずり落ちた。そこでおばさんは、人の手から手へとびうつり、だれかれかまわず、手や顔をなめながら、上へ上へとはいあがって、とうとう二階席へはいりこんだ。

…

半時間ほどたつと、カシタンカは、にかわやにすのにおいのする人たちのうしろについて、通りを歩いていった。ルカー・アレクサンドルイチは、よろめきながらも、さすがに心得たもので、なるたけ掘割ほりわりからはなれようとはなれようとしていた。

「おれは、どうせ生まれぞこないさ。……」と、彼はつぶやいた。「だがな、カシタンカ、おめえは——やつぱりたりねえなあ。人間とおめえのちがいは、まあ、大工とさしもの師のちがいみてえなものさ。」

ルカー・アレクサンドルイチと並んで、せがれのフェジューシ

カが父親の帽子をかぶって歩いていった。カシタンカはふたりの背中をじつとながめた。すると、自分がずっと昔からふたりのうしろを歩いているのだ、浮世のあら波も一刻たりとも自分をふたりからはなさなかつたのだと、うれしくてたまらない気がするのだつた。

カシタンカは、壁紙のよごれた部屋や、がちようや、フヨードル・チモフェーイチや、おいしいごちそうや、けいこや、サーカスのことを思い浮かべた。けれども、今となつては、そうしたことかみんな、長い、ごちやごちやな、重苦しい夢のような気がした。……

(К а ш т а н к а, 1887)

青空文庫情報

底本：「カシタンカ・ねむい 他七篇」岩波文庫、岩波書店

2008（平成20）年5月16日第1刷発行

2008（平成20）年6月25日第2刷発行

底本の親本：「チエーホフ全集 第七卷」中央公論社

1960（昭和35）年発行

※底本の二重山括弧は、ルビ記号と重複するため、学術記号の「《》」（非常に小さい、2-67）を「《》」（非常に大きい、2-68）に代えて入力しました。

入力：米田

校正：noriko saito

2010年7月6日作成

2012年2月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

カシタンカ

KASHITANKA

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 アントン・チェーホフ Anton Chekhov
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>